

町史

とっておきの話

206

洋画家 渡部 等

只見瞽女夜話

小林ハル・初めての八十里越

瞽女の大抵は幼いころに視力を失っており、子どもの行く末を案じた両親が家の代が代わってもその子の暮らしが立つようと、按摩か瞽女かの選択肢の中で選ばれた道でした。越後という雪の多い環境下、閉じきりの家の中の囲炉裏焚きの煤煙、雪中の紫外線、貧しさによる栄養失調、そして患っても医者に診せられなかったことなどが原因して視力を失う子どもが多かったようです。かつては全国に瞽女のような生業をもつ人が男女を問わずたくさんいたのですが、いつしか越後だけに残ることになりました。それがどうしてかは定かではありませんが、一説には全体としてそういう人たちが養うだけのお米の余裕が他国よりすこしだけあったこと、さらに江戸期に良寛さんをあたたかく迎え入れたような社会的な温情の土壌があったのではないかと私

は推測しています。

小林ハル……この明治二十二年（一九〇〇）生まれの最後の瞽女さん、そうした幼いころに視力を失い、親方に預けられ修行に出された一人です。今の三条市出身で、大まかにいうと長岡瞽女に分類されます。この人が十一歳のときに初めて八十里峠を越えて只見に門付旅に来ています。そのときの辛い思い出を口伝で長々と述べています。

「親方のフジという人は意地の悪い性格で、子供の私をできれば早く修業を諦めさせて、親から縁切金を取ろうと思っているフシがありました。十一歳になった夏に八十里を越え、会津の旅に出た途中のこと、田倉（注・田子倉）という集落に泊まりました。師匠たち三人は宿に入りましたが、まだ十一歳でろくに唄を歌えない私だけがのけ者にされて一緒に泊めてもらえず、自分一人で宿を探して歩き、やっとある農家に泊めてもらえること

になりました。その晩、泊めてもらうのに瞽女の身で何もしないでいたのでは申し訳ないと思つて、自分が持ち歩いているオモチャの三味線で宿の人に師匠から習ったばかりの「葛の葉の子別れ」を精一杯唄つて聞かせました。すると宿の人は、小さな子供の瞽女が上手に唄つて聞かせてくれるわ、と褒めてくれたのです。平素「お前はだめだ、下手だ」と言われ続けて来た幼い私は、宿の人が喜んでくれた、自分の唄でこんなに喜ばすことができるのだ、とすつかり嬉しくなりました。――『最後の瞽女 小林ハルく光を求めた一〇五歳』

NHK出版）と、そこまでは良かったのですが、ハルさんは宿の人が何げなくもらした「この話の先はどうなるのかね」の言葉に、かつて家の爺さまから

三味線を奏でる瞽女
(渡部等・絵)

